

## 共感された異文化－『東京に暮す』を読んで

95E120 品田千早

「自分の事を他人はどう思っているのか」、「自分は他人の目にどの様に映るのか」といった事は、誰しも少なからず関心があるであろう。これと同様に、自国やその文化が外国人によってなされた解釈には、どこの国の人であろうと興味を覚えるだろう。一つには自分と文化背景を異にする“他人”の目で自国とその文化を見られること。もう一つには自分の目でそれらを見直せる点においてである。私はその事をキャサリン・サンソムの『東京に暮す』を読んで強く感じた。

特にこの本は1928年から1936年の間の日本の様子を描いたものであるから、現在の日本ではもうあまり見られない“日本”を知ることができた。よって私にとっては新鮮であったし、一種のカウンター・カルチャーショックの様な驚きを感じることができた。またこの本の中の日本は、第二次世界大戦のほぼ直前であることに気づいた。この時代に日本を冷静に、且つ温かく、ユーモアを持って日本を観察した著者に私は敬意を示すと同時に、日本と著者の祖国イギリスがその後敵国となった歴史を残念に思った。

この本の中で私が特に興味を持ったのは、著者の述べた次の五点である。

- (a) 日本人の最大の特徴は自然と交わり、自然を芸術的に味わうこと。(p.43 第3章 日本人と労働)
- (b) 日本の女性はまさに日本民族の母であるということ。(p.45 第3章 日本人と労働)
- (c) 古くからの慣習に固執するあまり、外の近代精神の息吹に触れることのない家では時に悲劇が起こること。(p.46 第3章 日本人と労働)
- (d) 日本人にとっては、真実を述べることよりも人を喜ばせることの方がはるかに重要であること。(p.115 第6章 礼儀作法)
- (e) 「日本人はイギリス人のことをどう思っていますか」というイギリス人の問いに対する正しい答えは、「日本人はイギリス人のことなど全く頭にない」であったこと。(p.199 第11章 日本人とイギリス人)

まず(a)について最初に思ったことは、現在の日本人の生活に該当しないということだ。しかし、私の祖父母の以前の生活を考えると、著者の言っていることに納得がいく。私の祖父母が農民であった様に、かつて日本人の大半は農民であったし、日本は稲作を中心とする農業主体の国家であった。人々は日の出と共に土を耕し、一生を終えると土に帰っていった。また日本人の住居は大地に密着し、あたかもその一部であるかの様に見えたと、著者は指摘している。よって、日本人の最大の特徴が当時、自然と交わることであったと言われた理由は理解できる。

次に自然を芸術的に味わうという部分を考えてみたい。これにはまず自然に対する感受性が不可欠であるし、自然を遮断したり、克服したりする対象とみなすのではなく、友人あるいはそれ以上の存在として見る必要があるであろう。著者は生け花や日本の庭を日本人が自然を芸

術的に味わう例として挙げ、さらに一般の日本人が雪が解けていく様を感嘆しながら眺めたり、女中が丸まった葉や萎れた花を美しいと感じて立ち止まることなどを挙げている。私は著者がそのことに気づいたことをうれしく思うし、日本人の自然を味わう繊細で豊かな心を認められた様で誇らしく思う。しかし、現在の日本では農業に携わる人が減ったばかりではなく、それと共に自然と触れ合う場が減り、日本人の最大の特徴であった自然を芸術的に味わう心も失いつつあるのだと思う。自然保護と併せて、自然と一体化した生活から生み出された日本の芸術の伝統を理解継承し、高めていくことが日本人の長所を大切にすることにつながると思う。

(b)については、私は最初意味が理解できなかった。日本女性が日本民族の母ならば同様にイギリス女性もイギリス(アングロ=サクソン)民族の母といえるのではないか。なぜ「まさに」という強調の副詞まで付けて、著書は日本女性を日本民族の母と定義したのだろうか。その答えは、最終章である13章「日本の女性」にあった。

著者の母国イギリスでは、女性は全員母親になるとは限らないということだ。母親にならない女性とはどういう場合かというところ、

- ①独身として職業をもって生活する場合。
- ②結婚しても子供を産まない場合。
- ③結婚して子供は産んだが、母親として実際に育児をしない場合。

特に最後の③の場合は、イギリスの上流階級の女性に該当する。乳母や家庭教師が雇われて、子供の育児や教育を行う。

一方日本では女性は例外なく結婚し、子供を産んで、母親になり、実際に自分で子供の面倒をみると著者は当時の日本の女性の実態を述べている。日本では上流階級の女性であっても、女性は自分の手で子供を育てたいという。以上のことから、日本女性が全員母親になり、且つ実際母親として子供の育児と躾を任されていたことから、日本女性イコール日本民族の母の定義がなされたのだと思う。

しかしながら、この定義に関して付け加えなければいけないことがもう一つある。それは、日本女性の内面を著者が観察したもので、日本女性が優しく思いやりがあるという点である。その優しさは日本女性全般に共通する「単一民族国家」だけに見られる優しさであるという。そして、日本の男性は日本の女性なくしてはやっていけないとある。つまり表面的・形式的には男性主体の日本社会は、実は女性の支えと献身が基盤にあってこそ成り立っているということが、この定義から読み取れるのではないだろうか。

女性の社会的地位が男性に劣るものであっても、日本人の男女の間には対立ではなく不思議な調和が見られると述べられている。当時の日本は著者の目からは「平和な農村国家」と映っていたことを忘れてはいけないが、不思議な調和と表現されたのはおもしろいと思う。日本の文明から堅苦しい形式をすべて取り去ると、後に残るのは、「偉大な素朴さ」であると著者は言う。素朴さが偉大であると感じられるのは、著者が文明国から来て文明のもたらす善も悪も知っているからだと思う。しかし、「偉大な素朴さ」という言葉は日本文化の真髄を言い当てていると私は思った。

例えば、西洋の建築物は壮大で装飾的で威圧感があり、素材は石で頑丈だが、日本の物は豪邸でも、比較的小規模で質素で無防備にさえ見える。素材も木であるため、異民族が侵入して来て火を付けたらおしまいである。だから、「素朴な偉大さ」とは、日本の島国という地理的条件が生んだ安穩さと、農耕民族として大地に根ざした生活から生まれたものだといえると思

う。それは当然建築のみならず、日本文化全体の基であると思う。

著者は日本文化に対して概して肯定的で、良い面と悪い面を含む習慣でも良い面を評価している。だから著者が(c)で「悲劇」といったことは、よほどのことであると思う。それは日本の女性に関することである。高等教育を受け、知的で意欲的な女性の力が日本社会で発揮されていないと指摘されている。日本人は子供を可愛がり、家族は子供のことを第一に考えるので、日本女性が外で働いても職業と子供の世話を含む家事との両立は可能であるだろうと書かれている。女性が人生の選択を自分で行えず、親の決めた結婚や、兄弟のいない場合、家族会議で決められた養子の男性との結婚に従わなくてはならないことを著者は残念がっているのである。

(b)で述べた様に、当時日本の女性は結婚し、子供を産み育てることが義務とされ、又女性の両親や家族・親族にとっても結婚を世話するのが同様に義務であった。だから、一女性の個人的幸福は最重要項目ではなかった。日本女性が「家」制度等の旧来の習慣のため、個人の幸福や自由を無視されていることは、女性にとってばかりでなく日本社会にとっても「悲劇」だったのだと思う。

又「悲劇」は男性にも起こっていた。「長男だから家業を継いで親の面倒をみた」という話は今でも私達にはさほど不自然には聞こえないだろう。日本人が親戚で結婚や養子の決定、墓参り等を行い、その結束が強いので、そこから逃れて生きられないと著者は言っている。私は日本人はそれぞれが「個人」であるというより、「全体の中にある全体のための個人」といった考えを強く持っているのだと思う。だから自分の思い通りに行動したり、思ったことを言うのに戸惑いを感じたり、苦手だったりするのだと思う。これについては次の二段落で、他人あるいは相手を意識しすぎる個人に絞って書いてみたい。

(d)の「日本人にとっては、真実を述べることよりも人を喜ばせることの方がはるかに重要である」という所ですぐに思い出したのは、E.M.フォースターの『インドへの道』である。アズズ博士が自分の妻は亡くなっているのに、場の雰囲気壊さない様に計らってうそをついたという箇所である。(これは、「文化文学比較論」で触れられた点である。)そのインド人の性格の傾向と、著者が日本人に見つけたそれが一致したのが興味深い。イギリスでは個人の自由とプライバシーを、日本では家を基盤に和を大切にすると著者が述べている様に、状況を円滑にして、全体の調和を保つことを優先するのは東洋的考えであり、それを貫くには西洋的個人主義は二の次になるのは必然のことだろう。よって東洋人は率直な個人的意見を即座に言うことが得意ではなく、さまざまな要素(自他との社会的地位関係、自他の面子、全体の利益と調和等)を考慮して返答するので時間がかかる。またその返答が真実であるかどうかということより、その返答による結果が良かったり、無難であったりすることの方が東洋では大切なのである。

又著者は、日本人の様に相手の気持ちに左右される国民はいないと言っており、それを湿気が多い日本の気候のせいであろうと推測している。そして、相手の気持ちに左右されるのは、日本人がいつも和解が成立していないと話し合えないからだとしている。

「私たちが怒れば怒るほど、日本人はわかっていないのにわかったふりをし、できもしないのにあれこれと約束をして、何とか私たちの機嫌を取ろうとします。」(pp.60~61)と著者が日本に滞在していた時の体験から書いているが、今だにその描写は日本人に関して凶星である様な気がしてならない。日本人は日本人同士や信頼関係のある人に対しては相手に左右されず

に、YES-NOを言えるが、気を使わなくてはいけない相手や、ましてや外国人には、それができない傾向があると思う。自分自身が相手に良く思われていないと、相互の人間関係が続行できない、あるいは続行しづらくなる。よってその場しのぎの嘘や自分の心に反する言葉を日本人は発するのだと思う。この様に日本人が相手や他人の顔色を常にうかがわなくてはいけないのは、日本文化が「恥の文化」(ルース・ベネディクト『菊と刀』)であることが大きく関わっていると思う。

私は著者がこの第6章で「日本人を理解する唯一の方法は、他の国民を理解する時と全く同じで、まず相手に同情をよせ、そうしているうちに相手が好きになることです。」(p.119)と言っているのにここで注目したい。著者はそう言っているだけあって、西洋的思考と東洋的思考の相違のため、いらいらしたり、戸惑ったりしたこともあったが、常に日本人のやり方を否定せずに、日本人がその様な行動に出る背景・理由を分析し解明した時には日本人の心理まで考えて、思いやりのあるコメントをしている。そして、日本流の行動様式の優れている点を必ず強調している。これこそが異文化理解の秘訣だと思う。

(e)については日本が国際化してきたため、必ずしも日本人が他国の人々に興味がないとはいえない。海外旅行や留学、国際結婚はもうさほど珍しくなくなってきた。しかし(e)はやはり今だに“日本人”の本質を言い当てているように思えてならない。前述した様に日本人は日本人の内輪意識が強く、さらには親類縁者の結び付きが強い。これは裏を返せば外国人に対して排他的で、親戚以外には手を貸さないということになりかねない。

日本にいる外国人は増加しても“外人”という言葉が違和感なく使われ、長期間日本にいても韓国人や中国人は“在日・人”である。英語では、“Japanese-American”と日系アメリカ人は呼ばれ、頭に一はついて、一応 American と呼ばれている。しかし日本では、日本人以外を日本に滞在している外国人と呼んでいるのである。

海外に住む日本人が誤解されたり悪く思われるのも、やはり日本人が自国流を他国でも通そうとし、異文化を理解し適応しようとする努力が欠けているからだと思う。異文化を理解する過程では、自国の文化を他国の人々にも紹介することで、自分がそれを再発見することがなされるべきだと思う。日本は地理的にも歴史的にも特殊な面を持つが、それらを日本人が理解し、他国の人々に積極的に説明することで、“日本人”は初めて理解されるのだと思うし、日本人も他国の人々について理解できるのだと思う。

最後になったが、この本には多数の挿し絵があり、本文理解の手助けになるばかりでなく、絵自体がユニークで楽しめる。画家はマージョリー西脇で、著者の友人でイギリス人である。日本人の西脇順三郎と結婚し来日した経験がある。絵は筆でスケッチ風に描かれていて、日本人の生活の特徴を端的に捉えている。それぞれの絵を見ていると、その場面における人々の声や周りの音まで伝わってくる様だ。例えばそば屋の配達人が7~8段の器を重ねて、それらを片手に載せて自転車をこいでいる姿は、もう現在の日本ではほとんど見られないので、懐かしい感じがする。また、列車の中で老人から子供までのおのおの居眠りしたり、弁当を食べたり、しゃべったり、新聞を読んだりしている絵には思わず苦笑いしてしまった。夏、百貨店に演出として置かれた氷柱に、田舎から来た日本人の客が触っている絵や、本屋で人々が本を買う気がないのに、立ち読みしていることを「無料図書館」と称した絵などは実にコミカルだし、ドラマチックでもある。その他にも興味深い絵が数々あり、それらの絵を描いた作者の日本人の生活に対する観察力と洞察力に感心させられる。また、画家の日本人を観察している眼差しも

絵の中に込められている様で、それは優しくもあり鋭くもある。よってこれらの挿し絵のおもしろさは、日本文化に興味関心や同情を持って文化背景を異にする人によって描かれた産物であると思う。

#### テキスト

キャサリン・サンソム著、大久保美春訳『東京に暮らす』（岩波文庫，1977）

原典は Katharine Sansom, *LIVING IN TOKYO*. 1937